

---

# ネギま！ 夜の刀を持つ者

ケフィア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギま！ 夜の刀を持つ者

### 【Nコード】

N3626X

### 【作者名】

ケフィア

### 【あらすじ】

懲りもせず四作目……書けないと思いますが。

作者の暴走……もういい加減にしろや。

……原作書きたくて仕方なかったんです、すいません。

今回は麻帆良が舞台、時期はネギが来る一か月前の話から入ります。

ヒロインは刹那を予定しています（ハーレムものにはしないように

します)

主人公は元剣士、刀を捨てた身で麻帆良に来ましたが、そこで色々な事に巻き込まれ、戦いに巻き込まれていきます。今回はネギアンチで行こうと思いますが……そこまでひどくはしません。

剣士チートなので魔法関係は一切使いません(主人公)

それとこれは作者の自己満足の小説です、そこら辺をあしからず。

**零刀目 再び刀を取った男（前書き）**

すいません、原作の話が書きたかったんです。

申し訳ありません。

感想は常時お待ちしております。

## 零刀目 再び刀を取った男

走る、走る、走る、それしか頭の思考を飛ばさない。いや、できない……運動不足の体には、久々の全力疾走に耐え切れるほど、耐久力がないらしい。

暗闇を当てもなく走り抜ける、『どうしてこうなった？』とか考えられない。ただ走る、後ろからは気配を感じる。

「ハアハア……」

すでに限界ギリギリ、足もガタガタ、肺は空気を強く要求している、心臓は……言うまでもない。実際のところ、今の俺は倒れてもおかしくない状態だった。しかし倒れるわけにはいかなかった、『背中に抱えている少女』を早く治療しなければいけない。

普段の俺なら、この状況を大いに喜んだはず、一般男子中学生として『美少女』と言えるレベルの少女をおんぶしているのだ。背中には柔らかな感触と女の子の匂いがする……しかし、そんなことを気にしていられるほどアホではないし、命の危機に発情するほどクソツタレタ人生は送ってない。

「クツ?!」

足がもつれかけたがなんとか持ち直す、背中の少女に衝撃がいかない様に最小限にとどめる。地面に赤い『ナニカ』が飛び散る、ナニカじゃねえよな？ 血だよ……俺をかばって クソツ!! 長い髪の毛が俺にかかる、さっきまでゴムでまとめていた髪……サイドテールだったなあ。

「恩人を……死なせてたまるかよ!!」

「ザンネンダツタナ、ニンゲン」

後ろから片言の日本語が聞こえる……あいつら、まだ追ってくるのか？！ ちなみに背中 of 彼女に怪我を負わせたのはあいつらだ。ちなみに人間じゃない、ああ、俺も幻覚を見てるんじゃないかと思っ  
たよ、残念がら現実だ。<sup>リアル</sup>俺だって混乱してる、後ろに居るのは鬼だ。

いや、本物の角が生えて筋肉ムキムキな……まあ、手に武器を持ってるのは確かだな。後ろからぶんぶんとさっきから何かを振っている音がした。

「しっけえな！ どっか行きやがれ、筋肉ダルマ！！」

「ソノオンナヲオケバイイ、ヒサシブリニ、オンナノニクガクイタイ」

「ハッ！ それだったらスーパーで鶏肉でも食ってるッ！！」

息絶え絶えだったのが氣力を、振り絞るために声を上げる。

こうしないと、本当に倒れてしまいそうだった……そう思った瞬間、地面の石に躓き顔面から地面に叩きつけられる。当然おぶっているので両手が使えない、つまりは受け身がとれなかったわけだ、そのままコンクリートに頭をぶつける。

衝撃が頭を揺らす、そして地面に転がる俺と少女……名前知らねえんだよ、しょうがない。地面に力なく転がる少女、俺は脳を強く打ってしまったせいだ、全身が動かない。軽く脳震盪のようだ、しかし鬼はゆっくりと彼女に近づく。

「ヨウヤクアリツケル、ククク、ゴクロウサマ」

口を動かしたいがパクパクと地上に出た魚のように声が出ない。  
ふと地面を見ると、傍に一本の木の棒が転がっていた。木刀に見えるかもしれないが……仕込み刀だ、つまり真剣だ、正直真剣には良い思い出がない。むしろ嫌な記憶しかない、俺は自分から進んで刀を捨てた、そのときに剣技は全て封印した、二度と使わないと誓ったはず　なのに……

「（なんで手が伸びてんだよ……師匠との約束を破る気か？）」

過去に行った過ち、師匠との死闘、全てが鮮明に思い出せる。  
二度と刀を握らない……というよりも二度と戦わないことを誓ったのに、なんで見知らぬ女なんかはその誓いを破ろうとしているんだ?!  
脳が拒否しても、体はまるでいつものように刀に手を伸ばす。鬼は少女に覆いかぶさる寸前だった、そのとき何か俺の中で弾けた。

「  
零閃ぜろせん」

昔のように超高速で抜刀する、零閃を使い、鬼の腕を切り裂く。  
鬼は信じられないような眼で腕を見てから……絶叫する。

「ウガアアアアアアアッ!!　ウデガ、ウデガアアアアアッ  
!!!」

「……うるさいなあ」

信じられないくらい頭がクリアになる、体が凄く軽い。まるで当てはまったピースをあてはめたようにぴったりと、あれから一年たつのに……衰えていない、昔の剣筋そのものだった。ひどく落ち着く、さっきまでの恐怖心はすっかりなくなつた、今はただ斬りたいと言

う思いだけだった。疲労？ そんなものは『刀』は考えなくていい。恐怖？ 『武器』が恐れるか？ 答えは否だ。

「キ、キサマアアアアアアア！ ニンゲンノブンザイデ！」

「人間ですが何か？」

爆縮地ばくしゅくちを使って鬼の目の前まで来る。手にある刀は自分の体の一部のように自在に操れる自信がある、随分いい刀だ、持ち主の腕前の高さがわかる。しっかりと斬線を見切り、刀を振り上げる、鬼は迎撃しようとするが……遅い。

「奥義……雷迅らいじん」

気のエネルギーを電気に変えて、刀に纏わせる。その後足裏で気を爆発させて瞬間的に加速力を得る。そのまま振り下ろすと、鬼の体を斬り伏せる。そのまま、苦悶の表情を見せながら消える鬼。

「……ああ」

がらんと刀が手から落ちる。最低だ……俺って、本当に変わっていない。あの時から変わっていない、いたずらに剣技を出し、自らの欲望のまま刀を振るう姿、一番嫌悪する姿なのに……いいと思っってしまった。あのまま斬り続けたかった、久しぶりに味わう肉を裂く感覚が心地よかった。倒れている少女も見る……月明かりに当たって幻想的までに美しかった、俺は刀を拾い納刀し、少女の横にそっと置く。出血は止まっていたがかなりの量の血が流れたので輸血しないとやばいだろう、そう思う。

「刹那ッ！！……誰だ、お前は！」

ふと視界に褐色肌の少女が走り込んでくる、その手には……銃が握られていた。刹那……って言うのか、この子、いい名前じゃないか。というか、銃向けるなよ、危ないだろ？

「誰だと聞いているんだッ！ 答えろ、返答次第では」

「麻帆良学園中等部2 - A、夜刀夜識だ」

そのまま急速に暗くなる視界、ぼーとした頭で聞こえた声は……

「ただの狂った刀だ」

自分の冷たい声だった。



一刀目 刀を捨てた者と刀を持つ者（前書き）

今回は独自解釈があります、というか誰か、学園結界について教えて！！ 作者、原作読んだの一年前で最後だから、効果忘れてもった。

今回は不快感に思う表現がると思います、そこは申し訳ありません。

それでもいいと言う方は……どうぞ。

追記・夜識は『三年前』に刀を捨てたと書きましたが……正しくは『一年』前の間違いでした……すいません。

## 一刀目 刀を捨てた者と刀を持つ者

時間は前回の話の午前十時まで巻き戻る。

なぜあんなったか？ 気になる人もいるようだしな……では始めようか、刀を捨てた少年と刀を持つ者の物語を。

||||| 夜識視点

カタンコトンと電車に揺られながら、自分の持ち物をしつかり押さえる。

大型のキャリアバックと鞆を持っている手には感覚がなかった、ここまで一時間程度、東京に行くまで合わせると三時間弱は電車に乗って荷物を持っていた。

「……麻帆良、か」

コートのポケットからパンフレットを出す。そこには『ようこそ、麻帆良に』と書かれていた。

麻帆良学園都市、埼玉県麻帆良市にある巨大な学園都市……なんでも年の初めは行方不明者まで出るやらなんやら……学園都市の名に恥じず、幼稚園から大学までのあらゆる教育設備が存在し、学生の数は優に三万を超える、らしい。というかこれはパンフレットを読んだら最初に書かれている概要の部分だ。

学びの里として豊かな自然に囲まれ、交通機関、公共施設、病院、巨大アーケードやレストランといった、生活環境も十分に整えられ

ている……都市だからな、というか、そこで暮らせるよな？ 絶対暮らせるだろ。

「はぁー、……転入とはな」

まあいいがな、むしろあのまま学校に居ても、俺は孤立していったらうな。少し一年前に事件を起こしたせいで……まあ、生徒から恐れられたと、こんな感じだ。

師匠に『どうせなら学園都市に行ってみたらどうだ？』と言われたので、去年の夏ごろに見学しに行った、時間は腐るほどあったしな。とても大きかったし、個性的な生徒ばかりだった、俺は速攻で麻帆良に行くことにした。しかし……少し諸事情で遅れてしまい、今は三学期の終盤くらいだろう、ちなみに俺は中学二年生だ。受験はすでに合格して、学費免除の特待生の資格も取れた。

「……なんで師匠は『コレ』を渡したんだろうか」

ずっしりとした重さを感じる棒状の物、風呂敷に包まれているが……中身は真剣だ。というか俺が一年前まで愛用していた刀、『夜明』だ。

なぜか刀身が真っ黒で、いくら斬っても刃こぼれ一つしない刀、斬線をきつちり見切れば、鋼鉄も切断できる……けれども二度と使うことはないだろう。『護身用』と言われたが、俺は素手でも十分強い、訓練もしてたし、修業も続けてた、刀だけは触れなかったがな。

出発する日、つまり今日に無理やり渡された。俺の師匠であり、俺の祖父、夜刀孝仁、気強化の体で、俺の全力の気に乗せた刀を受け止め、一振りて海を割ったり、ふらりと出かけて外国で、テロリストと戦ったりする、人外だ。

「…………はあ」

口を開けても二酸化炭素配合の俺の溜息しか出ない、無茶苦茶鬱だ。師匠には大学卒業まで戻る気はないと言ったし、荷物も持ってきた。正直、学費免除がなかったら来てなかっただろう……まあ餞別と言つて百万渡してきたときはびっくりしたがな。

『次、麻帆良、麻帆良』

「…………考えても仕方ないか」

考えても仕方ない……まあ、時間はたっぷりあるんだ。まずはやりたいことを探して、頑張ればいいさ。

そんな決意をしながらドアが開く、荷物を持ち直し、刀の重さに嫌悪しながら歩き出す。

「…………迷った」

…………迷った。数十分後

なんとか麻帆良に来たんだが……迷った。ナントコツタイ、ダンテコツタイ、パンナコツタイ、今いるのが大通り。今日は休日なので学生やら大人やらがたくさんいる……すごく見られてるんだが？ それに……デカいな、都市の中央にめちゃくちゃデカい木がある。……なんで観光名所にならないんだろうか？ というかみんな普通に暮らしてるから、普通なのかな？ でもあの大きさは異常だし、出してる力が……いいや、気にするな、気にしてどうする？ 木の枝一本もらって木刀でも作るか？ んなこ

としないさ……まあ、町中にロボットみたいなのが居るが……気にしない。

「誰？ あのコート着てる子」

「すっごく可愛いよね！」

ウ、ウグウ……ああ、そうだよ。俺の顔は母親に瓜二つ、つまり女顔なんだよ！！ 何度間違えられたことやら……ここに来る途中もナンパされたんだが、男ナンパするな。だから黒コート着てるんだが……どうやら失敗だったようだ。

「はあ……鬱だ」

ぐぎゅるると腹が鳴った。現在十一時ちょうど……今日は朝飯を食べてないから腹減ったなあ、辺りを見回すと……一軒だけあった。えーと？ なになに『超包子』？ 名前からして中華料理店だな。

「行くか？」

そのままふらりふらりと歩いていくと

「アイヤーーーーー！！」

女の子が男に飛び蹴りしながら店から出てきた、と言っかこっちに向かってきてるんだが？！！

「ッ……避けるアルヨ！」

「ちょ、おま」

俺はそのまま突っ込んでくる男に回し蹴りをして、回避する。少しめりこんだような感じがしたが……気のせいだ、手加減できない、これってヤバくね？

「アイヤー、ごめんアルヨ……」

「い、いや俺は大丈夫だ、何があった？」

「それが」

そんなこんなで店に入り、注文して目の前のカンフー少女としゃべっていたが　こ、これは……！

「モグモグ……ゴクン、つまり盗撮してたと？」

「そうなんアルヨ、ワタシの名前は古菲<sup>クフエイ</sup>」

「バクバクバク……！」

「そ、そんなに食べて大丈夫アルカ？」

う、うまい……ラーメンにチャーハン、餃子、どれをとってもうまい　が一番うまいのが肉まんだ。ほのかな甘み、それにいて歯ごたえ抜群の肉、うーむここまでうまいなんて……作っている奴の顔が見たい。

「ん？ はふひかまふ（大丈夫だ）」

「ちゃんと噛まないとダメアル」

モグモグ……ゴクリ。

「おかわり」

「アイヤー?! まだ食べるアルカ?!」

「どうしたネ、クー? …… ってまだ食べてるネ?!」

まだラーメン三杯、チャーハン二皿、餃子三十個以上、肉まん十個  
なんだが? 食い過ぎなのか?

「うん、うまい。最初はいきなり人が飛んでくるからびっくりした  
」よ

「そうか……それはすまないネ、私はこの『超包子』のオーナー。  
チャオシンエン  
超鈴音ネ、よろしく」

「ああ、俺は夜刀夜識……性別は男だからな?」

「知ってるネ」

え? あれ? まさかわかってくれる人がいるなんて!!!  
感激のあまり、椅子から立ち上がり、超の手を掴んでぶんぶんと振  
り回す。

「わ、わかってくれるのか! 俺が男って!!!」



言っても一年前だがな。まるで死んでも何かを成し遂げようとする眼だ、巧妙に隠してあるが……俺には分かる。

「ふう、元気なのはいいだがネ……」

「まあ元気なのは良い事だ、……少しばかり良すぎるがな」

「そういえば夜識s　夜識はここに来るのは初めてか？」

「ああ、今日から麻帆良の生徒だしな」

「転入生？」

「絶賛迷子中、というか男子中学校の職員室に行かないとな……」

「迷子……しょうがないネ、案内してあげるヨ」

え？ マジかよ、これは柵からぼた餅……いや、迷子も歩けば救いあり（わけわからん）ま、まあ……ラッキーかな？　見た目美少女と一緒に歩けるとは、今日についてはな。

少し顔の筋肉が緩むのがわかる……師匠が見たら、確実に木刀で切断されるな。ちなみにウチの師匠は木刀で木を切り倒せる

本格的に化け物だな、そういう俺も切込みくらいなら入れられる……

……まだ未練あるのかよ、畜生。

「……ありがとな、超」

「あまり嬉しくなさそうネ、こんな美少女が案内してあげると言うのに……」

「いや、正直言つとめっちゃくちゃ嬉しいです」

「なっ?! い、いやそうストレートに言われると」

「アイヤー、肉まん……って超、どうしたネ?」

「……どうもしてないヨ?」

「バクバクウマウマカクカクシカジカ……ウマカー」

「よ、夜識、日本語でいいヨ?」

「I am very じしやあじしじや delicious」

「え、英語アルカ? ……プシュ」

「ちょ?! クー? クー……!!!」

……悪ふざけに後悔した、今日この頃。

その後、肉まんを消化しクーを叩き起こして、とりあえず会計を済ませるが……周りの男からすごく睨まれてるんだが……なぜ? まあいいや、とりあえず会計に一万近く使ったのは予想外だった、食いすぎたか? これでも腹三分目なんだが? そして店の外で超を待つ、なんでも着替えてくるやらなんやら……なぜかクーまで来るそうなの。

「待たせたネ、夜識」

「行くアル!!!」

「……無駄に元気だな、おい」

「クー、宿題ちゃんとやらなきゃだめネ。またタカミチ先生に怒られるヨ?」

「べ、勉強できなくても超がいるアル!」

「見せるの禁止」

「望みが絶たれたアル……!」

……ほんと元気で幸せそうで　羨ましいな。

そんなことを思いながら超の案内で歩いていく、クーは周りの建物の事を教えてくれる……助かるな、来たことあるが地理がさっぱりだぜ。

「そういえば夜識は、武術を習っていたアルカ?」

どうしよう……俺の流派、全人流は剣術、武術などを取り入れた流派だからな。今は剣術はやってないがな、とりあえずあたりさわりがなくらいに。

「ああ、昔な、剣道を少し」

「そうアルカ、剣道で思い出したアル。ウチのクラスの刹那も剣道部だったアル」

「どのくらいの腕前だったんだ?」

「い、いや……全然ダメだったよ、才能がないからな」

嘘だ、才能の塊と称されたこともあるし、一度見た剣術は再現できる自信がある、あくまで剣術だけが足運びもなんとかいける気がする。

しかし途端にクーの顔が疑問でいっぱいになる、というか顔にでてるがな。

「嘘アル、夜識のさっきの動きは素人じゃなかったアル」

「……護身術で体術はやってるんだ」

「そう……でもその後ろの風呂敷の中身は？」

「……木刀だよ、ウチの祖父が護身用に、つてな」

超の言葉に一瞬ビビってしまった……中身に気付いている？ まさか、そんなはずは……ないはずだ、一回も触らしていない。

もしも知っていたら？ その時は

「ッ……！」

一瞬前まで考えていた思考をやめる。お、俺は……まだ懲りていないのか？ あの時のように……また。

「どうしたネ？」

「夜識……戦っていいアルか？」

「……は？」

「はあ……またか？」

クーを見ると目をキラキラさせていた、というか純粹に戦いたいつて感情がわかる……いい、いや、ちょっと待て、俺は訓練はしてるがと言つか戦いたくない、あの日から戦うことが……怖い、また誰かを傷つけるんじゃないかって思うと……つらい。

「嫌だ……俺は　　戦いたくない」

「そうアルカ……残念アル」

あれ？ このタイプの人間は好戦的で、戦うまでしつこいはずなんだが……おかしいな？

「戦う気がない奴と戦っても、つまんないアルヨ」

「確かに……な」

「二人とも……ついたヨ」

いつの間にか目の前には学校らしき建物が……へえ、大きいな。これが俺が通う場所か……大丈夫かな？

「ここまで来れば……大丈夫ネ」

「すまん、今度また店に行くから」

「ほんとアルカ?!」

「あ、ああ肉まん、美味しかったし、値段も良心的だしな」

「ふう、お客様一人確保ネ。わざわざ、外出した意味はあつたネ」

……デスヨネー、俺にフラグなんて立たないしなー、しがない中学生ですよ。

まあ……本当にフラグがたつたら面白いがな。

「んじゃ、そういう事で。またクー、超」

「そう力、それじゃ、また来てくれ」

「必ず来るアルヨー!!!」

そう言つて去つていく二人、まあ少し名残惜しいが行くとするか……意外と時間たつてるしな、早く終わらせて今日は荷物整理をしよう。

〓〓〓〓〓〓〓〓一時間後

「お、終わった〜」

なんとか職員室まで行ったんだが……各書類、教科書、指定制服などなど、正直疲れた。訓練はしてるが……体力は減る一方なんだよな、動きを確認するだけだからな。

とりあえず、男子寮まで来たんだが……さっそく見られてるがな。

先生からは『これが寮の鍵だ』と言われて渡されたしな、とりあえ



日、外に干して……」

とりあえず、キャリーバックの中からいそいそと服を出す。とりあえず三日分の服とジーパン、三日分のパンツを入れる、明日用のパンツはすでに用意してるから四日分か。ジーパンは洗わなくても一週間着れるからいいか。

日用品と食器を入れていくと結構時間がたった、後は掃除したからか……汚かったからな、着物をたたんでタンスに入れる。ベッドの下に刀を隠して置く、ここに置いておけば……いずれ忘れるさ、そんなことを言いながらどんどん片づけておく。

今日中に終わらせば、明日は好きにできる、軍資金はたっぷりと諭吉さん99人いる、一人野口さんが混ざっているがな。

時計がないので、持ってきた携帯の電源を入れると

「は、八時い?!?!」

やっべ、買い物してきてねえ!! ここからスーパーは遠いし……もうしまっているだろうなあ。ミスった、フライパンとか用意してんのに……どうしようか。

「そつだ、コンビニに行こう」

俺は財布を持ちながらそう考えた。

後で思えば、ここで部屋で寝ておけば、俺は……普通の人生を送っていたのかもしれない。誰にも会わずに、普通に生きて、普通に暮らして、普通に恋して、普通に仕事についていたのかもしれない。この後起こったことには激しく後悔している、けれど感謝もしている、まあとりあえず、俺の最高で最低で奇想天外な学校生

活はここから始まった。……俺と違い、刀に誇りを持ち誰かを守る  
うとする少女。銃を片手に金と甘い物のために戦う少女。記憶を失  
いながら必死に戦おうとする少女。封じられながらも一人の男を想  
うばb……少女。未来のために戦う少女。父親のような英雄になる  
うとする少年。こいつらに振り回される……そんな生活の始まりだ  
った。

〓〓〓〓〓〓？視点

多い 私は愛刀の『夕凧』を振るいながらそう思う。

私の名前は桜咲刹さくらさきせつにや……刹せつ那だ。ううう噛み癖が直らない……ど  
うしたらええの、このちゃん？

……ゴホン、すまない、少し失敗した。私は麻帆良女子中等部……  
つまりは中学生だが、今は夜の警備をしていた。

私の任務は主に二つ、『お嬢様の護衛』『麻帆良に侵入してくる奴  
らを倒すこと』だ。私は護衛役……まあ、この現代日本で中学生な  
のに護衛役をしている輩など、私を入れれば数える程度だろう。も  
う一つの『麻帆良に侵入してくる奴らを倒す』これは、麻帆良の図  
書館地下に眠る、魔法書の禁書、後は麻帆良の象徴である世界樹の  
力、後は麻帆良の占拠などだ。ここ麻帆良は一種の霊地だ、正直、  
ここは最高の舞台……術者ならば、魔法使い、陰陽師ならば喉から  
手が出るほど欲しい場所だろう。

しかしながら、対策もせず渡すことはさすがにしない。ここには大  
規模な結界がある 通称『学園結界』、物理的攻撃、魔法的  
攻撃にもある程度作用するが、気休め程度にしかならない、真の力  
はその封じ込める能力だ。この結界には妖怪など魔の者の力を抑え  
る作用がある、そして『認識障害』。これはあまり好きじゃない、  
なぜなら認識障害とはある意味での『催眠術』のようだからだ。例

を挙げると世界樹だ、私だって事情を知らずに世界樹を見たら驚くだろう、つまりは認識障害とは、認識をずらすのだ。』　　は異常』  
という認識を』　　は当たり前』という感じでだ。

「たあっ！！」

そのおかげで少し異常な事しても、ここではあまり問題にならない。そうでなければ『魔法先生』『魔法生徒』、私や真名みたいな、外部の協力者が戦闘できるはずがない。

「刹那！　後ろだ」

「斬岩剣！」

私の武器は大太刀の夕風、大太刀なので予想以上の力で振るわなければ、きちんとした軌跡を描けないが……そんなやわな鍛え方はしていない。

しかし、今日は本当に多いな、通常なら従者と召喚した魔物数体程度だが……今日は色々な場所で戦闘が起こっている。相棒の真名がいなかったら危ない場面もあった。

「まったく学園長も……これは報酬の上乗せを要求するな」

「まずはこの危機を乗り越えてから　だッ！」

切り払いをしながら牽制する。

そこで念話による通信が入る……どうやら救援要請のようですね。

『こ、こちら東側B、突破されかけている！　応援を！！』

「……本当にこれは上乘せだ」

「あ、ああ」

まったく、ここの職員ときたら理想はいいのだが……腕前がそこま  
でない、信用できる魔法生徒と先生は限られる。こつやつて大規模  
な襲撃の際には、応援のせいで持ち場を離れざるおえないこともあ  
る、まあそれは真名の仕事だな。ここで紹介しておくが、彼女は龍<sup>たつ</sup>  
宮<sup>みや</sup>真名<sup>まな</sup>、腕のいいスナイパーで傭兵だ、ちなみに私のルームメイト  
だ。

「ここは任せていいか？」

「いつも通りだろう？ 早く行け」

「すまない、それじゃ！」

真名が銃を持ちながら走っていく。私はこつちにくる妖怪や鬼をさ  
ばいていく。

この分だったら……さばき切れる！！ そう思った瞬間、私はあり  
えない物を見た……一般人？！！

「……なんの冗談だ？」

「な、何してるんですか！ 早く逃げてー！！」

「んな無茶言うな、お前も逃げろ！ よくわからんが しま」

反応が遅れたのだろう、黒コートを着た少女の背後に鬼が……くう  
！！



「ねえ？ 逃げるの？」

「ッ！！ なんて……お前が」

「アハハハ、おにいには奈々を救えなかつたんだよ？ その人は救うんだ」

なぜか俺の……妹の声が聞こえる、そんなはずはない。妹は……奈々は……死んだ（・・・）はずだ、俺の目の前で

「見てよ、おにい……奈々の首ね」

「やめろ……」

「とれちゃうんだよ？」

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおお……！！」

俺は振り払うために気で強化した拳で……妹に

「ハッ？！ ハア……ハア……うぐう！！」

強烈な吐き気、そして後悔やらトラウマ、そのすべてのせいで体が重い……さっきまでの光景が鮮明に思い出せるが……床の感覚がおかしい、まるでベットのような柔らかさだ。それに服装が違う、黒コートから病院で着るような服装だ。

「お、俺は……ゆ、夢か？」

しっかりと自分の手のひらを握る、ひどい手汗だ、冷や汗で服が肌に張り付いて気持ち悪い……畜生、まだ忘れることができない。奈々……俺はどうしたらいいんだ？

「起きたね」

「誰だ？ 今俺は最高に気分が悪いんだが」

「僕の名前は高畑<sup>たかはた</sup>・T・タカミチ……麻帆良では女子中等部の先生をしている」

「……タカミチ？ ああ、クーと超の先生？」

「あれ？ 古菲君と超君を知ってるのかい？」

「ああ、昼に少し飯食ってきた」

「そうか……彼女の所のご飯は美味しいしね、ラーメンが一番おいしい」

「……聞き捨てならんな」

「肉まんだろ？ ふつう考えて」

「ラーメンだよ」

「肉まん」

「ラーメン」

…… よろしい

「「ならば戦争だ」」

「バカな事してないでください、高畑先生」

「お前は……名前わからん」

目の前に居るのは、あの時の少女……足に包帯巻いて、両手には松葉絵杖まで……俺のせいか、どこ行っても疫病神だな……刀捨ててもこうなのか。

「桜咲刹那です」

「夜刀夜識だ、これでも男だから間違えるなよ？」

「え？ う、嘘でしょ?!」

「嘘ならいいねー、アハハハハハ」

「夜識君、とりあえず君に言いたいことがある」

目の前のタカミチ先生の感じが変わる、おおっ、この人教師か？  
プロだろ？

殺気と……警戒かな？

「どうして戦闘してるところに行っただ？」

「コンビニで弁当買ったら、物音がして……それで見に行ったら」

「私と出会ったわけですか……無茶しますね」

「知るか、一般人である俺が」

「君は本当に一般人なのかい？」

「……何が言いたい？」

「実はね、あの時、君の剣術を見ていたんだよ」

どくと心臓が高まる音がした、体が無意識に震える。……やつちまった、あの時、なぜか体が動いただけとか言えない、多分こいつらは危ない仕事をしてるんだろう。あんな現象は普通じゃありえない、というかこの都市がいいとか思った自分を殴りたい。確実に勧誘される……また刀を使うことになる。

「見事な剣術だった、上位の鬼をほぼ一撃で葬るなんて……素人じゃできない」

「……俺は」

「そうなんですか？ 私は気絶していたのでわかりませんが」

「……夜識君、学園長が君に話があるそうだ」

「……学園長？」

「そうさ、この麻帆良学園都市のトップと言った方がいいかな？」

「俺をどうしようって言うんだ？ 記憶消去？ このまま日常に返してくれるのか？ できれば後者で頼む」

「無理ですよ、あなたはこの都市の秘密を知ってしまった。本来なら記憶を消されていましたよ……あなたに力があるからです」

「……力？ ただ刀振り回す程度の事か？」

「……どういう意味ですか？」

「そのままの意味だ、俺はただの人殺しの道具を使う気はない……そもそも俺はここに『学び』に来てるんだ、人助けの味方ヒーローなら戦隊物に憧れる奴にやらせる。というか遊んでる時間はないんでな」

「……遊び？ あなたにとって刀とはその程度の存在なんですか？  
！……」

「……くだらない、くだらないくだらないくだらないくだらない、お前に何がわかる。あつて間もない奴に自分の禁忌を破った拳句に、今度は勧誘だぞ？ 俺は嫌だね。」

「ああ、そんな『くだらない』存在だ」

「ッ！！ 力を持ちながら……ただ黙っているだけですかッ！！  
黙って見てるんですか！」

「……ああ、俺は二度と戦わない。誰のために戦うなんて無理だ、  
砕けた刀は 斬れないんだよ」

「はい、ストップ。刹那君、夜識君、そこまでだ。とりあえず学園

長室まで来てくれないか？」

手を叩きながらタカミチ先生が止めてくる。いつの間にか肩で息をしているのがわかる、何様のつもりだ？ 何のために俺に刀を持たせるんだよ、持ちたくないんだ。持たせないで……体中の力が抜けない、手はシーツを硬く握っている。

「そういえば……今何時ですか？」

「朝の五時だよ、ゆっくり寝ていたからね」

「そう……ですか」

「私は認めません……刀は人を守るためにあります！！」

……は？ 本気で言ってるのか？ 刀が……武器が人を守る物だと？

「武器は武器だ、人殺しの道具だよ。人を幸せにするのは、料理人の包丁だけだ」

「……夜識君、十分間で支度してくれ、君の荷物は横に置いてある」

そういつてタカミチ先生は刹那を連れて出ていく。

……なんだろうか、これでいいのかな？ 刹那にはああいったが、心の中では……俺はまだ

「バカ言つなよ……俺は」

あやまちを犯した人間だ。

その言葉が静かに部屋に響く、それに比べて陽気な鳥のさえずりは

……妙にきれいに聞こえた。

|||||十分後

「すまん、待たせたか？」

「いや、大丈夫だよ。それじゃ行くっか」

「……ふん」

完璧に刹那には嫌われたようだ……うん、やっぱり女の子に嫌われるのはキツイな。まあ別にいいがな、こっちは仲良くしようとは思ってないし、多分女子中等部のほうだろうし、会う機会はこれっきりだろう。

……と思っていた時期が俺にもありました。

学園室に入った瞬間、居たのは後頭部が異常発達した、妖怪じじい……これぬらりひょんだろ？ いや、ぬらりひょんだよね？！！！  
そう思いたい、こんなのが学園長なわけが

「ホッホッホ、来たの。ワシはこの麻帆良の学園長、このえ このえもん近衛近右衛門  
じゃ」

「すげえや、妖怪ぬらりひょんはマジで実在したのか」

「ワシ、人間じゃぞ？！！！」

「早く人間になりたいんだな？ わかります」





「 『魔法』は信じるかね？」

「 ……はい？」

……「うして、俺の学園生活が始まった。

まあ……初っ端で『魔法』はないだろう、ぬらりひょん……あ、弁当投げ捨てて来ちゃったぜ。

一刀目 刀を捨てた者と刀を持つ者（後書き）

~~~~~とあるログハウスの吸血鬼さん

「ふははっはは、面白いぞ、こいつー!!」

「マスター……どうなされました？」

部屋を見ると金髪の……まだ幼そうな女の子が水晶を見ながら高笑いをしていた。

そこに後ろでは、なぜかメイド服を着た……少女（？）がいた、よく見るとロボットの関節のような物が見えるが……おいおい、言おう。

「こいつ、私でも反応できない速度で近づいて、鬼を切断したぞ！」

刹那よりも腕前は上だな」

「そうですか……ところでマスター、そろそろ就寝の時間です」

「……まだ見ているんだ」

「……少しは外に出ましようよ」

「私は吸血鬼だ、太陽のある外に出てるわけがない」

「真祖ですから浄化される心配はありません」

無表情で淡々と言う従者と、かたや西洋人形のような美しさを持ち、頬を膨らませてる少女、実はこの少女は年齢五百歳以上の……俗に言う合法ロリである。

「いやーだ」

「駄目です」

「くうー!! 巻いてやるうー!!」

「ああ、駄目です、マスター……あああ!!」

なぜか背中にあるゼンマイを巻かれて悶える少女、そしてゼンマイを回しながらへブン状態……つまり悦に入っている少女、一部の方々が見たら、ご飯三杯はいけるだろう。

「ふはっははっは、コイツの名前は夜刀夜識か……ふふふ、あーっははっはっは……ゲホゴツホ」

「ハアハア……だ、駄目です」

……あえて言おう、こんな主人と従者で大丈夫か？

「モウ慣レタ」

人形に返事された……カオスである。

〓〓〓〓次回予告

作「さて、今回夷の麻帆良到着、そして原作キャラのバカイ……古



## 第二刀 秘密、そして後悔（前書き）

えーとお久しぶりです、待っていた方もいるかもしれませんが、その方には申し訳ありませんでした、ぶっちゃけ書く気が全く起きなかつた。

最低のいいわけですが、今回はタブンシリアス多め、そして主人公の発言が女々しいです、嫌な方は読むのはやめた方がいいと思います。

あと、タイトルが違うのは途中で内容を変えたからです、それではどうぞ！

## 第二刀 秘密、そして後悔

「ふう……どうしろって、言うんだよ!!」

あれから一時間弱、学園長室から戻ってきた俺はベットの横たわりながら、ため息を吐く。あ後は怒涛の展開だった。

まずはこの世界には【魔法】と呼ばれる、俺の【気】とは違う力があること、この学園はメセンブリーナ連合と呼ばれる……えーと別世界にある組織の所有物らしい、じじいはそこから選定されてやってきたらしい。

い、いや、俺もなんか信じがたい、と言うかなんでこうなる?!?!俺はここに将来の職業と勉強しに来たのに!! なんて面倒事に巻き込まれたんだよ?! 俺は少し気が使える一般人だ! ま、まあ素手でも岩を砕けるのが一般人かわからんが……。とりあえず、今日は朝から疲れた……が。

「は、腹減った……」

これでも昨日の昼から食べていないのだ、というか弁当はどっかに置いてくるし……うとうと、泣けてきた。

とりあえず、さっきまで聞いたことを思い出す……えーとまずは

「……………一時間前、学園室について

「……………なんじゃ、そりゃ、じゃあなんだ? 【魔法】を信じると?

無茶言うな、こっちは頭が混乱しているんだ」

「事実だよ、君も【気】を使っているだろ？」

「ああ、それがどうした？」

「【気】があるなら【魔力】もあるでしょう、そう思いませんか？  
夜刀さん」

「夜識でいい、と言うか……まあそうだが」

実際、俺も魔法はあるんじゃないかと思っていた。気と言うのは生命エネルギーの一種だ、強ければ強いほど生命力は高いし、体に充満させれば簡単な怪我、病気はそれだけで治せる、ウチの奥義にそれを応用した治療術もあるが……。話がそれだな、この世には絶対に表裏がある、光と闇、熱と寒さ……。なら気の【裏】は？　それが【魔力】なんだろう。これは仮説だからわからんがな。

「話を続けようかの。この地には……世界樹という物がある」

「ああ、あの馬鹿でかい木か、つつかあれも【魔法】で作ったのか？　観光名所にピッタリなデカイ木だぜ？」

「……待て、お主は【アレ】が異常に見えるのか？」

「は？　当たり前だろ？　世界中どこ探したって、あそこまでデカくはないだろ。どうせ【魔法】を使ってデカくしたんだろ？」

あれ？　なんか全員、目を見開いているんだが？　俺なんか変なこと言った？

「き、君はいつから異常だと思ったんだい？」

「去年の夏、ここに見学した時から」

「あ、あなたは【認識障害】を受け付けないんですか?!」

認識障害? ……おい、まさか。

「おいおい、冗談言つなよ。お前ら……人の認識を  
変えて  
るのか？」

「……そうじゃ」

その瞬間、俺の中の『何か』が切れた。

俺は最速の動作から学園長に突きを繰り出すが……何かに阻まれる、まるでバリアーのような物で受け止められている感じた。

「が、学園長! 夜識君、やめるんだ!」

「あんたら……わかってるのか?! これは集団催眠と同じだぞ!  
」!

「やめてください!! 夜識さん!!」

「……確かにそうじゃ、ワシらがやっていることはおおよそそついで物じゃ」

「ならッ!」

「お主に何がわかる? 毎晩毎晩戦い、傷つき、それでも戦ってい

る者たちの気持ちが。どれだけワシらが守ろうと苦労しているか

「それでも、戦闘を隠すためだとしてもッ!!」

「……お主は戦闘が嫌いじゃな？」

当たり前だ、どこに戦闘が好きな奴がいる。昔の俺ならいざ知らず……俺は二度と戦わない、それが償いだ。俺が戦っても……また誰かを傷つける。

「ああ、そうだ。俺は二度と戦わない、あの時は非常事態だから戦った」

「なら……口出ししないことじゃ」

なん……だと？ このくそじじい!!

「戦わない者が……命を懸けて戦う者に口出しするではない！ ましては自ら剣を持つとしない者が言っなッ!!」

「……知るか、そうだとして俺は否定するよ」

確かに俺は戦わない。刹那を見たとしても、こういう怪我をする奴がたくさんいるんだろうな、全部麻帆良のためだっこともわかる戦わない……まだ部外者である俺に言われたくないだろう。それに目の前の学園長も教育者だ、本当は心苦しいんじゃないか？ 生徒をだましてることが……だが、それでも俺は否定してやる。

「学園長、そろそろ次の話に行きましょう」

「……すまん、怒鳴ってしまった」

「いや、俺も悪い、すまない。戦っていない奴が言っても説得力皆無だよな」

「……」

うーむ、やっぱり刹那の目が痛いです。

と言うか、なんか……妬み？ これは嫉妬か？ はて、なんかしたのか俺は？

「次にこの学園についてじゃ」

それからの説明はカット、めちやくちゃ長い癖に、最後まで辺は連合の愚痴になっていた。要約すると

- 1・この世界のほかに、火星に【魔法世界】と呼ばれる世界があるらしい。
- 2・学園はそこにある【メセンブリーナ連合】、通称連合の配下、管理されている。
- 3・世界樹には膨大な魔力があり、毎晩毎晩、他の組織が襲いに来ている。
- 4・この都市は【魔法先生】、【魔法生徒】によって守られている。一部外部の協力あり。

「こんなところじゃな」

「えーと、質問なんだが」

「どうしたんだい？」

「あれか？ タカミチ先生もぬらりひよ 妖怪じじいも刹那も魔法使いなのか？」

これが疑問だったんだよな、俺のイメージとしては魔法使いって、箒にまたがって猫と共に宅急便してる様しか思いつかない。って、あれの影響かな？ アニメってあまり見てないからわからない、たしか友人のつてで一回見たことあるが……杖とか鎌とか振り回して、砲撃していたような……うーん、わからん。

「私は剣士です、魔法生徒ではありません」

「僕は魔法使いじゃないんだけどね……けど魔法先生だよ」

魔法使えるから、魔法先生だと思っただが？ まあいいや、素人の俺が口出すことじゃないだろ、というか関わる気はないんだが？

「というかワシ、言い直した意味なくね？ 変わらないじゃないか」

「……その頭を見る、孫も泣いてるぞ」

「木乃香にはそんなこと言われ取らんわ！！」

「うっせい！ さっきまでのシリアスはどうした！！」

「お主のせいじゃ……！」

「てめえの頭のせいだ……！」

「ググググ、よろしいならば」

「」

「やめてください、学園長、夜識君……夜識君はともかく、学園長、あなたはいい歳でしょう?」

肩で息しながら、俺とジジイは咳をして場の空気を元に戻す。

「ゴホン、すまなかった……夜識君」

「ああ、二度目だな」

刹那さんの眼が痛い、本当に刺さりまくってる……俺が何したんだ  
!!

とりあえず……俺の処分についてだ、とりあえず俺のせいで怪我した刹那、そして俺の入院代だ。確実に金がかかっているし、払えと言われれば払う、ツケって奴は残しておくのが嫌なんだ……自分の過去以外。

「さて……お主の処遇についてじゃな」

「……ああ」

「さっき言った通り、麻帆良女子高等部に編入じゃ。幸いお主はま  
だ学校に行っておらん、モデル生徒として女子中等部に行った……  
と言う設定じゃ」

「一つ聞いていいか? なぜ女子中等部に?」

「近々の、ある人物をこの学校で学ばさなければならんのだ」

「……つまりはそいつのサポートに回れと?」

「そういう事だね」

タカミチ先生が補足してくる。まあこのぐらいだったら別にいい、さつき言われた時はあまりの衝撃に驚きすぎた、冷静に考えれば彼女を作るチャンスじゃないか。いや、一般中学生である俺も、青春時代はそれを謳歌したい……まあいつかは償いをしなきゃいけないんだがな。

女々しいのはわかるさ、自分でも嫌になっってくる。

「……反対です、学園長。これ程の力の持ち主が来るなんて都合が良すぎます」

刹那は厳しい目で俺を見てくる、まあ正論だろ。俺は素人じゃないし、別にこの場にいる全員を【殺せ】と言われたら実行できるかわからないが、タカミチ先生と刹那ぐらいだったら不意打ちで行けるかもしれない。

……と言うか俺が暗殺者だったら刹那を見捨てる、あそこで見られてたとしても一般人として処理されるだろうし、記憶を弄繰り回されても別にいいだろう。まあ見られる危険性があるが。

「まあそうだな、桜咲さくらさきの言う通りだ。俺が裏切り者だったらどうする？ そいつを殺してしまつかもしれないぞ？」

「それはないじゃろ」

「学園長！！」

「黙っておれ、大丈夫じゃ。こんな老いぼれじゃが人を見る目はあると自負しておる」

「……刹那君、僕も彼を信じたいと思う」

「俺を信じる？」

「信じる誰を？ 俺をか？ 笑いがこみあげてくる、同時に自分自身を引き裂きたい衝動に駆られる。」

「妹一人守れずにのうのうと生きてる俺を？ 信じる者を裏切って、生きようとしている俺を？ ふざけるな、俺は戦わないと決めたんだ。守る自信がないなら戦わなければいい、戦わないのなら失う物もない、誰も傷つけずにいられる。」

「何をためらう必要がある？ 言えよ、言っちまえ、たった一言だろ？」

「なんで」

「ッ……！」

「言えないんだよ！！ 楽になっちまえよ、もう俺は疲れたんだよ！ 殺すとか殺されるとか飽き飽きだよ、もう……戦いたくないんだ。」

「今日の午前零時ちょうど、世界樹前広場に来てくれんか？」

「……何をするんだ？」

「君を紹介しようと思っただけ、何心配するでない。夜の警護はさせんよ」

「話は終わりか？ なら俺は帰る」

そう言つて俺は方向を百八十度変えて部屋から出ようとする……何も言わないのか？

「夜識君、ワシは君が戦いたくないのなら無理に戦わせることはせん……じゃがな、【君自身が戦う道を選んだ】のであれば、ワシはお主を止めんよ」

どくと心臓が跳ね上がる、俺が再び剣を……握るのか？

「ないな、俺は絶対に選ばない」

その言葉を最後に俺は学園長室から退出した。後は付近の先生に道を教えてもらつて部屋に帰つただけだ。

||||| 刹那視点

私が助けた少女。名を夜刀夜識やしよるしき、私を救つてくれた人らしいです。らしいと言うのは人づてで聞いた話だからなのですが……そいつ曰く、刀の技量が私よりも高いそうです。

自分の刀が達人級とは思えませんし、最強とも自負していません。まだ未熟な剣術と認識していますが、ソコソコの実力はあると思つています、それよりも強いと聞けばおのずと興味を持ちます。

まだ松葉杖を突かないと歩けない体で病室まで行くと……件の少女くだんがいました、暗がりで見えていたからよく見えなかった部分もあります。

首元まである黒髪、キリツとした眼、そして少女のような柔らかかな唇、女の私でも魅了されるほどの美しさでした。

「バカな事してないでください、高畑先生」

「お前は……名前わからん」

そう言われ、気付きました、私は名を名乗り、向こうも名乗りましたが……男なんですか？ 自信を無くします、別に綺麗とかそういう事を言われても困るだけです、私のような【忌むべき子】が美しいなんて言われる筋合いはありません。

高畑先生が彼の剣術について話したら、明らかに雰囲気が変わりました……素人とは思えない雰囲気、私は静かに臨戦態勢に入ります。

「……力？ ただ刀振り回す程度の事か？」

その一言、その一言に私の中にある何かが動き出しました……振り回す【程度】？

ふぎけるな、どれだけ私が努力して今の実力を手に入れたか知っているのですか？ 私以上の刀の技量を持ちながらそう吐き捨てることが、どれだけ残酷な事かわかっているのですか？ それだけの力があれば、このちゃんを守り切れるのにッ！！！！

私は感情のまま、彼に言葉を投げつけました、どうして？ なぜ？

そんな言葉がぐるぐると頭の中を連続ループしていました。

「私は認めません……刀は人を守るためにあります……！！」

最後に私はこう宣言しました。これは私の信条であり、誓いでもあります……もう【あの時】の様な事はさせない……！！

高畑先生に止められて私はしぶしぶ退出しました……ウチはまだ言いたいことがたくさんあるんや……！！

「刹那君、君は彼の表情を見たかい？」

「表情……ですか？」

「君の事を羨ましそうな、それでいて後悔している表情だった」

羨ましい？ 私を？ むしろ私の方が羨ましい……その力があれば、もっと多くの人を助けることができるのに！！

「ふう、まあ若い時は悩むべきだ。君も夜識君も」

そんな話をしていると彼が出てきた。彼の表情を見る……無表情だった、何も感じさせない人形のような表情。でも、でもなにか悲しそうだった、私は不機嫌そうに顔をそむけることができなかつたです。恥ずかしかつた、人の表情も読み取れずに己の意見せきをぶつけて、それでいて彼を罵つたのだ、今すぐここから逃げ出したい。

そんな私の気持ちを知つてか知らずか、学園長室についた夜識さんは……えーと、その、学園長の頭を少しおかしく言つてました（確かにぬらりひよんみたいやけど……このちゃんはある風にならんよな？）

「おいおい、冗談言つなよ。お前ら……人の認識を 変えるのか？」

「……そうじゃ」

学園長が夜識さんに学園結界の事を話したとき、夜識さんが怒つた。当たり前か、私たちがしているのは洗脳と呼ばれる行為に等しいし、後ろめたい気分がある……魔法先生たちにはないそうですが。

そして怒つた夜識さんは、私でも知覚できない速さで学園長に殴りかかつた……学園長は障壁を張つて防いだが、薄皮一枚、鼻の数ミ

り手前でした。もしももう少し遅れていたら学園長の顔に、拳がめり込んでいただろう。そこで私はレベルの違いに愕然とする、私の剣術は【神明流】と呼ばれる、退魔の剣術です。しかし少しですが拳や足を使った奥義もあります、が彼の動きには私の様なムラがなかった……綺麗と思ってしまうました。

「ああ、そつだ。俺は二度と戦わない、あの時は非常事態だから戦った」

「なら……口出ししないことじゃ」

私は次の瞬間、信じられない物を見ました。普段は温厚な学園長が声を荒げて怒ったからです。

「戦わない者が……命を懸けて戦う者に口出しするではない！ ましては自ら剣を持つとしない者が言うなッ！！」

夜識さんはその表情を受け止め、自分の考えを述べました……【戦いたくない】、普通なら臆病者と切って捨てそうな言葉ですが、私にはそうは思えませんでした。夜識さんの表情を思い出して、【私のように】心に傷を負っているのではないか、と思っただからです。そしてなぜか夜識さんが、女子中等部に転入してくることに……確実に【ウチ】のクラスに来るでしょうね。しかし学園長が言っていた【ある人物】とは一体？ まあその前に私は自分の考えを述べました。

「……反対です、学園長。これ程の力の持ち主が来るなんて都合が良すぎます」

そう、考えてみるとおかしい、なぜ彼ほどの実力者が来たのか。も

しかしたら【西】の刺客、または別組織の構成員かもしれません。もしも彼が本気を出して襲い掛かって来たら、麻帆良は大損害を受けるでしょう、彼は本気を出していない……むしろ余裕がまだある様に思えます。私が言ったらおしまいです、麻帆良の質は低い。理想は一人前だが、実力がない、もしも彼に一斉に襲い掛かっても負けてしまいます。

「まあそうだな、桜咲さくらさきの言う通りだ。俺が裏切り者だったらどうする？ そいつを殺してしまうかもしれないぞ？」

「それはないじゃろ」

「学園長！！」

「黙っておれ、大丈夫じゃ。こんな老いぼれじゃが人を見る目はあると自負しておる」

「……刹那君、僕も彼を信じたいと思う」

夜識さんが高畑先生の言葉を聞いた瞬間、一瞬だけ、ほんの一瞬だけだが泣いているように見えた。……同じだ、私と、ウチと同じや、誰かを傷つけて後悔している顔。

「夜識君、ワシは君が戦いたくないのなら無理に戦わせることはせん……じゃがな、【君自身が戦う道を選んだ】のであれば、ワシはお主を止めんよ」

学園長が退出しようとしている彼に問い掛ける。学園長にしては珍しい言葉だ、彼だったら夜識さんを丸め込んで、手伝わせるくらいの事はするはずなのに……横目で見た学園長の顔からは何も感じ取

れなかった。

「ないな、俺は絶対に選ばない」

そう言つて扉を閉める夜識さん……なんでしょうか？ 彼の事が知りたい、そんな気持ちが胸の奥で疼きました。なんなんでしょうか、この気持ちは？

「学園長、本当に良いんですか？ 彼は僕の眼から見ても優秀だ、真名君よりも強いかもしれません」

「……彼は迷っているのじゃ、戦うべきか、ここであきらめるべきか。彼はとても優しいじゃろ、その優しさで迷つておる。現に瀕死だった刹那君を助けた、本当に戦いたくないのであればその場から逃げ出していたじゃろ」

確かに、私を助ける理由なんてなかった。あそこで死んだら、私は後悔していただろう、けれど彼を見捨てていたらもつと後悔していた、と思います。彼もそうだったのでしょうか、悩みに悩んで私を助けてくれたのでしょうか？ わからない、わかりません。

「学園長」

「ワシは教育者の端くれじゃ、悩む若者を指導するのも仕事じゃ。例え、本国に逆らうことになつても……！」

学園長の事を……見直しました、いつもはひょうひょうとして頼りないですが、今は違います。教えを乞うべき立派な大人です……！」

「……ではその後ろの書類の山は？」

「フオオ?!! ……手伝ってくれんかの?」

「嫌です」

……訂正します、いつもの学園長でした。

|||||夜識視点

何もやることがなく、俺はなぜか筋トレや軽い運動をしていた。：

…夜風が気持ちいと感じられるほど、体を温めることができた。

今は午後十一時四十九分、俺は世界樹の広場に向かっていた。行く気はなかったはずだ、バックれるつもりだった、学園長はああ言ったが、他の人がどう言うか想像は難くない。【戦え】である。

絶対にそう言うはずだ、むしろ言わない方がおかしい。使える駒は使うべきだ、いくら力が強い駒でも使わなかったら宝の持ち腐れ、敵の駒にやられてしまうだろう。

「なんで来ちまったんだろうなー」

コートのポケットに手を突っ込みながら空を見上げる。不覚にも見とれてしまった、空が澄んでいるのか、少し星の輝きと満月が見える……そっぴや奈々（なな）は星を見るのが好きだったな。体が弱いからあまり外には出さなくなかったけど、星が見たいとねだってくるからこっぴり抜け出して見に行ったなあ、あの頃の俺は……やめとこ、いやな気分になる。

「そろそろかな？」

広場に着くとすでに人影があった。全員がびっくりしたような顔をするが、すぐに俺を警戒する……ぬらりひよんめ、連絡してないのか？

「待つんじゃない、彼が件の生徒じゃ！」

「彼が？ ……男なのですか？」

なにやら色黒のメガネかけた男が不審そうに言う……まあしょうがねえか、初対面で見抜いてくれたのは超だけだしなあ。

「ああ、俺は男だよ……で、ぬらりひよ じゃなかった、妖怪ジジイ」

「直した意味なくね？ むしろ悪化してね?!」

「が、学園長になんて口の聞き方をするんだ、君は！」

「そうですわ！」

なーんか金髪の女も噛み付いて来たんだが、と言うか周りの大人たちも少しキレてるな。ジョークくらい流せよ……あー、めんどくさい、これだったら来るんじゃないかった。

外野が勝手に騒ぐからどんどん騒ぎ出すし、なんか杖持ち出している奴もいるし、ああ、魔法使いつてあーいなののか、イメージ通りでなんか拍子抜けだな。

「落ち着かんか！ ……ゴホン、夜識君、紹介を頼む」

「えーと、夜刀夜識です。戦闘はしないのでよろしく」

「君は【強者】と聞いていたんだが？」

「俺は戦わない、今日は顔見せだけのために来たんだ。んじゃ眠いから帰る」

「待たんかい！！いくら何でもはやすぎじゃろ?!」

「知るか、後はあんたが説明してくれ、それと生徒も帰れ。学生は寝てる時間だぞ?」

「大きなお世話ですわ！ 私は自分の意思でここに居るのです！」

他の生徒も同意なのか、首を縦に振ったり口に出している生徒もいるな。どうやらこの金髪女がリーダー的存在(?)なのか、それとも指揮官的存在なのかわかんが、随分と自分のやることに責任感を持っているな……羨ましいな。

「それにあなたは中学二年生でしょうが、私は高校一年生、つまりは先輩なんですよ?」

「そうなのか、こりゃ失礼……えーと?」

「高音<sup>たかね</sup>・D・グッドマン、麻帆良学園聖ウルスラ女子高等学校に通う魔法生徒です」

「ご丁寧にどーも、聞いてないことまでペラペラと高音先輩でいいよな? コレでだめだったらどうしよう。」

「えーと、さつき名乗った通り夜刀夜識、麻帆良女子中等部に転入予定だ。詳細はそこで笑ってる、学園長ジーンに聞け」

「じよ、女子中等部？！……違和感無さそうですが（ボソボソ）」

最後の方が聞き取れなかったが驚くよな、男が女子中に転入するんだ……あー、なんでこうなったんだっけ？

俺がため息をついていると見覚えのある色黒の少女が歩み寄ってくる。

「お前が夜識かい？」

「えつと？ ああ、俺が気絶する前に居た銃持ってた人か」

「龍宮たつみや 真名まなだ。ウチのルームメイトを助けてくれてありがとう」

ルームメイト？ ああ、そっか確か通常、寮って二、三人で入るんだっけ？ つまりは刹那と相部屋か……にしても、俺と同じ年なのか？ むしろ成人前って言っても違和感ないぞ？ 後さ、なーんか違和感があるんだよな、あの時の鬼みたいな感じがする。

「どうした？」

「いや、ちょっと気になったことがあったから考えてた」

「そうか。私は傭兵でね、金さえもらえれば何でもする、最初は刹那を助けたお礼で安くするけど、次からは通常料金で取るからな」

「……傭兵か、あのさ。もしかしたらもしかしたりしないかもしれ

ないが、紛争地域で木刀もって戦車とか細切れにする奴見なかった？」

傭兵と言う言葉を聞いて即座に言っただけ。すると苦い顔をした龍宮がそこにいた。

「ああ、知ってるよ……何度仕事を邪魔されたことやら」

「すまん、それ俺の親父だ」

「……ほんとか？」

「ああ、マジだ。ウチの親父が迷惑かけたな、代わりに謝る、すまなかった」

「そうか、あいつの息子……なら、あの強さも納得がいくな」

どうやら知っていたようだ、師匠も豪語していたが『傭兵の中で俺を知らない奴はいない』とか言っていたから、もしやと思ったたらマジだった……もうなんか申し訳ない気持ちでいっぱいだよ。

「ゴホン！ 世間話はそこまでじゃ、聞いての通り彼は戦闘には参加しない。むしろ、彼を戦闘に参加させることはワシが許さん」

「な、何故ですか、学園長！ 彼ほどの強さならば」

「甘ったれるでない！ わしら大人がその分頑張ればいい話じゃ！ まだ十五にも満たない子供に期待する出ない！ ……ガンドルフイー二君、確かに彼が入ればワシらはもっと楽ができるじゃろう、しかしそれが【正義】なのか？」

【正義】？ なーんかぬらりひょんが真面目な事を言ってるが、興味はない……むしろ眠くなってきた、さて帰るか。  
俺は来た道を戻ろうと足を踏み出し、テクテクと歩いていく、誰も気付いてないな？ よしかえ

「待つてください、夜識さん！」

刹那に呼び止められた……また視線が集まっちゃったな、殺戮を使えばよかった、隠密行動も落ちてるな、いや別に良いが。  
真剣な表情で俺を見てくる刹那、一体どうしたんだ？

「なぜあなたは戦わないんですか？ それだけの力を持ちながら」

「答える義務はない、悪いがコレでこの話はおしまいだ」

「待つてください、理由も聞かずにな」  
「コヒュ?!」

イライラしていた俺は、高速で刹那に近づきのど元を掴みあげる。  
刹那は苦しそうに足をばたつかせるが……やめる気はない。  
喉を傷つけないように、しかし苦しむようにある程度の力を籠める。  
周りの奴らは啞然としながらもあたふたしながら各々の武器を構える。

「……これが答えだ、刹那。ここまでだ、【ここまで】が俺が譲歩できる答えだ」

「な、にを、い、ってる、んで、すか？」

「桜咲さんを離しなさい!!」

「危険人物だったのか?!」

「【聞くな】ってことだ、わかったか？」

頭の中がどんどんクリアになっていく……戦いたくないが、脅迫しないとは言っていないし、人に過去をべらべらと喋るような軽い経験じゃない。つまり、俺は怖かったんだ、刹那コイツが俺の過去に踏み入ってくるのが、拒絶されるんじゃないかって。矛盾だよな、本当に嫌われたくないならこんなことはしない、心のどっかでは嫌ってほしいのかもしれない。

真名やタカミチ先生、学園長は冷静に俺を見てくる……まるで試すように。

「き、きたいんで、す」

「物わかりが悪い奴だな……俺に関わるなっということだよ」

わかってくれ、刹那……もういいだろ？ 首を縦に振ってくれ、そうすればお前と俺の縁は切れる、二度と俺のような【臆病者】を目にすることは無い。眩しすぎるんだ、刹那の真っ直ぐな気持ちがあるで昔の俺を見るようで辛いんだ。

頼む、もうやめてくれ、頼む、刹那!!

「じゃ、あ、なんで……なんで私を助けたんですか?!」

「自分を盾にしてまで庇ってくれた奴を放っているほど落ちぶれた気はない」

「逃げればよかったじゃないですか」

やめろ

「見捨てればよかったじゃないですか」

やめろ

「なんで禁忌を破ったんですか？」

ヤメロ

「あなたは

」

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおっ!!!!!!!!!!」

俺は逃げ出した、絶叫しながら、惨めに泣きながら逃げ出した。  
後ろでは声が聞こえた様な気がした、振り返らず走った、がむしゃ  
らに走って走って走り続けた。いつの間にか自分の寮の部屋に着い  
ていた、ベッドに飛び込み、布団を体に巻いて目を閉じる。

「俺は、俺は……」

ぐるぐると刹那の言葉が繰り返される、俺が聞きたい、むしろあの  
時の俺はどうかしていた、守れると思ったのか？ 一番大事な物を  
自分から失っておきながら？

「もう、もうわからない……奈々あ」

もういない、自分の大事な宝いもつての名前を呟いもつてきながら俺は眠りに体をゆ  
だねた。

暗い暗い意識の底に。

その日、なぜか俺は悲しい夢を見た気がした。

## 第二刀 秘密、そして後悔（後書き）

くくくくく 再びとあるログハウスの吸血鬼さん  
「zzzzz」

昨日あれだけはしゃいでいた少女は爆睡していた。なぜなら今日は件の男が来るので少し真面目に準備していた。

昨日の夜から、つまりあのけんかの後、用意をしていたわけである。どのタイミングで出ようか、魔法はこれを使おうとか……それはもう念密に。

「マスター、もう行く時間ですよ？」

「後五時間、むにゃむにゃ」

「（ハアハア、マスターがこんな甘えた声で!!!）」

緑髪の従者はなぜか鼻から赤い物が出ていた、彼女は機械、もちろん人間の体液ではない、では何か？ 主人の愛である（え？）

「ケケケ、モウダメダナコリヤ」

「仕方ないですね、今日はもう無理ですね」

「フッフ、ぼーや、わたしひゃ、エヴァンジェリン。悪の魔法使いだ！」

夢の中でスケジュール通りが進んでいるのか、寝言で名乗っている吸血少女、それをほほえましく見ている（二歳）のロボット、



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3626x/>

---

ネギま！ 夜の刀を持つ者

2011年12月11日00時58分発行